

中学校における規範意識の育成をめざして —他者や集団との関わりを大切に考える活動プログラムの開発—

中大路 浩一

規範意識を育成するためには、子どもたちが所属する学級や学校の中で、人間関係を深めていくことが重要であると考えられる。他者に対し受容的な考え方をもち、規範を肯定的に受けとめようとする態度が養われると考えるからである。本研究では、まず中学生の規範意識の現状を知るために、アンケート調査を行い、「本市の中学生の規範意識はどのようなものか」「指導する教師との意識の違いはあるのか」「生徒の自尊感情との関係はあるのか」などについて詳細に分析を行った。これらの結果を踏まえながら、道徳、特別活動、体験的な活動の三つをユニット化した「活動プログラム」を提示した。

第1章 中学生の規範意識の現状

第1節 中学生の規範意識は低下しているのか

近年、子どもたちの規範意識の低下が、教育問題として取り上げられることが多くなってきた。本市でも、全国学力・学習状況調査の「生徒質問紙」の集計結果や子どもたちの言動をみたとき、規範意識の向上は喫緊の問題となっている。

発達段階における中学生という時期は、一時的に規範意識の低下が起こると指摘されている。更に、近年の社会環境の変化により、社会が望むような規範を身に付けていない可能性が高い。

そこで、まず子どもたちがどのような規範意識をもっているか、その現状を把握することが、取組を進める重要な核になると考えた。

第2節 アンケートで見る規範意識の現状

研究協力校2校の中学生430名、教師40名に「規範意識に関するアンケート調査」を実施し、詳しく分析を行った。

「学校における行為」9項目、「社会における行為」6項目について、生徒と教師の容認度を対比した結果、各項目の生徒の容認度は教師の容認度と同じような傾向を示していることがわかった。

このことにより、学校では「教師の言動が生徒たちの規範意識の育成を左右する」といっても過言ではなく、教師はこの事実を真摯に受けとめる必要があるといえる。

第3節 自尊感情と規範意識との関係

「自尊感情に関する質問」12項目についてのアンケート結果では、教師が思うより、「自分は嫌いだが幸福と感じている」という中学生の意識が確認できた。自尊感情の中でも、自己肯定感が高い生徒に、規範意識が高い傾向が見られる。また、人間関係の深まりから自己肯定感が生じることも

明らかになった。これらのことから、生徒の規範意識の育成には、周囲との人間関係を深め、自己肯定感を主とした自尊感情を高める取組が有効であることがわかった。

第2章 学校教育での規範意識の育成

第1節 自尊感情の向上をめざして

最近の中学生は、社会環境の変化により、幼い頃から対人関係が磨かれる機会が減ってきている。そのために、価値観の似ている友だちとしか遊ばず、人間関係が広がらない「負のスパイラル」が生じている。そこで、対人関係能力を育成するために、「ソーシャルスキル・トレーニング」「構成的グループ・エンカウンター」「ピア・サポート」「アサーション・トレーニング」などの取組が、近年各学校で行われることが多くなってきている。

それに加え、本研究では、「指導者の育成」「授業時間の確保」「心の教育の充実」の観点から、道徳教育を軸とした「ユニット学習」を提示した。

第2節 道徳教育を中心としたユニット学習

「道徳の授業」を要として、「体験的な学習」「特別活動」とを関連させ、「ユニット学習」とした。この取組の中で、生徒に周囲との人間関係を深めさせ、自主的な学級活動が行えるようにした。

また、生徒の考えや思いを引き出す活動では、規範を逸脱してしまうことも考えられることから、一人一人の道徳的価値を高める必要がある。そこで、近年減少している、生徒の人と関わる体験を補い、道徳や学級活動の中で「意見交流」や「話し合い活動」により道徳的価値をみつけ、その価値を結び付けて実践する意欲を高めることが重要であると考えた。道徳教育の「補充・深化・統合」の技法を用いて、生徒の道徳的価値を高め、規範意識の育成をめざした。

第3章 規範意識育成のための実践

第1節 中学1年生における実践

○「合唱コンクール」を核としたユニット学習 －生徒主体で行う学級活動－

ユニットのねらい

学校の一員であることを自覚し、互いを尊重し協力していこうとする心情を育てる。

中学校に入学して3か月という、生徒はまだ互いに様子を見ている状態の学級である。そこで、道徳の授業では、活発な発言をするために、ランキング表を用いるなどの工夫を取り入れた。学級活動では生徒主体の話合い活動を行うために、生徒との事前の準備をていねいに行った。

この学習によって、生徒が活発に発言する姿が見られるようになり、学級内で互いの人間関係を深めることができた。

○「生徒会選挙」を核としたユニット学習 －意欲的に行動する生徒の育成－

ユニットのねらい

学校の一員として積極的に生徒会活動に関わり、よりよい環境をつくろうとする意欲を育てる。

生徒会選挙と後期の学級委員選挙の時期に実践した。道徳の授業では、自分が直接関わらない「悪い行為」を黙認することについて、自分の意見を出し合う意見交流を行った。学級活動では、生徒会活動や学級活動について、関心をもてるような話合い活動を行った。

生徒会選挙に立候補するなど、積極的に生徒会や委員会に関わろうとする生徒の姿が見られた。

第2節 中学2年生における実践

○「合唱コンクール」を核としたユニット学習 －学級で規範をつくる活動－

ユニットのねらい

集団の中でルールをつくり、皆で守っていこうとする心情を育てる。

2年生では、学級内だけではなく中堅学年として、より大きな視点から活動に取り組むことにした。道徳の授業では、意見交流の中でルールは守っていこうとする意志が大切なことを学んだ。学級活動では、班討議を行って学級目標を考え、みんなの思いを一つにしていく活動を行った。

このユニット学習により、みんなで決めたことを大切にしていこうとする合唱コンクールの取組ができた。

○「職場体験」を核としたユニット学習 －礼儀や作法を身に付ける活動－

ユニットのねらい

正しい礼儀や作法を身に付け、よりよい人間関係を築いていこうとする意欲をもたせる。

中学生では、従来からの形式やきまりについて反発する傾向が出てくる時期がある。そこで、道徳の授業では、礼儀・作法・挨拶を正しく身に付けることで良い人間関係を築けることを学習する。学級活動では、スキル・トレーニングを用いて、「聞き方」に関心をもつようにした。

職場体験学習の中では、積極的に大人に関わろうとする生徒の姿が多く見られた。

第4章 これからの規範意識の育成

第1節 ユニット学習の成果と課題

実践後のアンケートから、生徒の「学校における行為」についての規範意識が向上していることが読み取れる。また、1年生の学級では、他者や集団に関わろうとする姿が見られ、生徒たちに自主性と積極性がみられるようになった。2年生の学級では、生徒の自己中心的な言動が少なくなり、他者と協同作業が行えるようになった。

しかし、「社会における行為」「自尊感情」については、今回の実践授業での大きな変異は見られず、規範意識の育成は長い期間にわたり取り組むことが必要であることがわかった。

そこで、本研究では中学校3年間の「規範意識育成のためのプログラム」を作成し、活用していくことを提言する。

第2節 よりよい学習環境をめざして

学校のルールには根拠が希薄な「慣習」によるものが多くある。したがって、既存の法やルールを守ることを身に付けるだけでなく、集団や社会を大きな目でとらえ、判断できる能力が生徒には必要とされる。

このことを踏まえて、指導者が、学級や学校において「ルール」や「規範」を作る活動を生徒にさせることの意義は大きいと考える。これらの経験をした生徒は、「ルールは自他の権利を守るために存在し、守ることが大切である」ことに気付くことになり、規範意識の向上がみられる。

こうした取組においては、生徒の現状をどれだけ正確に把握・理解できるかが鍵となる。そのため、学校が「学習する組織」となることが大切である。